

氏 名 しん とう たか あき
神 藤 貴 昭
学位(専攻分野) 博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号 論 教 博 第 118 号
学位授与の日付 平 成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目 大学授業における相互行為に関する研究
——「大学授業フレーム」概念を用いて——

論文調査委員 (主 査)
教 授 田 中 毎 実 教 授 田 中 耕 治 教 授 松 下 佳 代

論 文 内 容 の 要 旨

大学授業は、どのように実践されており、また実践されるべきか。本研究は、このきわめて実践的な問いに答えようとするものであり、「大学授業フレーム」という概念を用いた大学授業の実践的・相互行為論的研究である。

「大学授業フレーム」は、ゴフマン (Goffman, E.) のいう「フレーム」を援用し構成された概念であり、「大学授業におけるさまざまな出来事とその出来事への主観的関与とを支配し組織化する、個人ないし集団の保持する枠組み」を意味する。大学授業への関与者(教授者、受講生たち、参観者たち、研究者たち)はすべて、それぞれの大学授業フレームに拠って、そのつどの授業場面を主観的に構成する。本研究では、大学授業フレーム概念によって具体的な授業場面での教員と学生、教員同士、学生同士の相互行為のありようが分析され、さらに相互行為経験によるフレームの生成や形成や成熟が「フレームの応答的変容」という生起を中心にして検討されている。フレームの変容に関連しては、ゴフマンも「転調」(keying)や「装い」(fabrication)などについて論及しているが、論者は、相互行為におけるフレーム変容に焦点づけて、あえてこの「応答的変容」という概念を構成したのである。全体の構成は、次の通りである。まず第Ⅰ章で大学授業に関する具体的・実践的研究のきわめて乏しい現状が示され、このような研究にとってフレーム概念を用いることがきわめて有効であるとする仮説が提起され、これを承けて、続く4つの章で実際にフレーム概念を用いた実践的諸研究がまとめられ、第Ⅵ章でフレーム概念の有効性仮説の妥当性が検討されている。以下、各章の議論をまとめる。

第Ⅱ章では、大学進学に際しての学生たちの大学授業フレームの再構成のありようが調査研究によって検討された。学生が「予期的フレーム」で授業状況を定義する際に奇異に感じたことに関する自由記述が分析され、因子分析によって奇異経験測定尺度が作成され、動機づけや活動との関連が検討された。共分散構造分析の結果、「教授過程が放任であることの経験」が「学習意欲低下」を媒介して「受講意欲低下」に影響を及ぼし、また、「自由が尊重された経験」が「受講意欲低下」に影響を及ぼしていること、さらに、「受講意欲低下」が「大学における活動」に影響を及ぼしていることが明らかになった。学習方略の再構成についていえば、学生は、奇異に感じる経験に直面して、それまでの予期的フレームを変えようとしたり、逆にこれを無理に維持し続けようとしたり、学業から遠ざかろうとしたりするのである。さらに、論者自身が学生たちの大学授業フレームの「応答的変容」をめざす授業をおこない、授業過程を詳細に分析した結果、応答的変容の成立条件が相互的自己対象化と自己肯定であることが示された。

第Ⅲ章では、VTR インタビュー法によって、ある授業での教授者のフレームによる状況定義とフレーム調整のありようが検討され、教授者が学生のフレームとのズレにある程度自覚的でありその修正に努めることなどが示された。つまり、教授者は学生の誤解や文脈の非共有を察知し、自らの「大学授業フレーム」とのズレに気づき、自ら「大学授業フレーム」を変容させ、再説明や授業計画の変更をおこなっていること、さらに、のっていない学生、主体的に参加しない学生や寝ている学生の存在などを察知し、自らの理想の「大学授業フレーム」とのズレに気づき、フレームを変容させていることなどが指摘されたのである。さらに別の教授者の授業について、授業への主観的関与の度合いである「ノリ」が分析された。学生たちが顔を上げて自分の話を聞いており、積極的に相互作用をおこなおうとする言葉(主張や投げかけ)が教授者自身から

発せられているとき、教授者は「ノリ」を感じ授業に動機づけられている。この場合には、教授者が保持している「大学授業フレーム」で学生たちのそれとのズレを感じることなく、スムーズに授業が進行しているのである。こうして、学生たちとの相互行為が教授者のフレームを形作り、形作られた教授者のフレームが相互行為を作る。このようなフレームの変容過程が示されたのである。

第Ⅳ章では、教授者がフレームによる授業の定義ないし主観的関与を急激に修正せざるをえなくなるような「ストレス場面」についての調査がまとめられている。それによると、ストレスの多くは学生の反応に関するものである。さらに、VTR インタビュー法により、3名の教授者について検討が加えられた。なにがストレスでありどんな対処がとられたかについては、教授者それぞれによってまちまちであるが、強いて言えば、対処としては放置や問題解決行動が多くみられた。ただしどのような場合にも、ストレスに直面した教授者には、短期的・長期的に学生の状況定義と自らのそれとを何とかして合わせようとする「調整」の試みがみられるのであり、このような調整が繰り返されることによって教授者自身のフレームが変容しさらには成熟するともいう。

第Ⅴ章では、サイバースペースを利用し、「フレームの応答的変容」をめざして設計された2つの遠隔授業を取り上げている。論者は、教授者団の一人として、この2つの授業の設計と実践に参加している。1つの授業は、京都大学と慶應義塾大学が連携し、通常授業、電子掲示板での議論、合同合宿をおこない、教育とコミュニケーションについて理解を深めることを目的とした「KKJ」（京都大学慶應義塾大学連携ゼミ）であり、今1つの授業は、鳴門教育大学大学院の現職教員が受講する授業と京都大学教育学部授業をビデオチャット・テレビ会議システム・電子掲示板でつないだ「KNV」（京鳴バーチャル教育大学）である。2つの授業の設計にあたっては、できるだけ教授者の介入を少なくし、サイバースペースを2つの集団の会合「場所」として利用して、受講生たちの相互的な自己対象化と自己肯定、そして大学授業フレームが応答的に変容することがめざされた。授業記録やインタビュー、掲示板の書き込みなどを丹念に分析した結果、論者は、この目論見が十分に達成されたとしている。

最終章である第Ⅵ章では、まず、これまでの議論を根拠として大学授業の具体的研究にとって「大学授業フレーム」概念の使用がきわめて有効であることが確認され、さらに、この概念の内容が包括的かつ詳細に規定されている。次いで、このフレームを相互的に対象化する場の設定について議論がなされている。この議論によって、大学授業フレーム論をFD（Faculty Development）論、大学教育評価論などに結合することが可能となるのである。

論文審査の結果の要旨

本研究は、「大学授業フレーム」という概念を用いた大学授業の実践的・相互行為論的研究である。今一度繰り返すなら、「大学授業フレーム」とは、ゴフマン（Goffman, E.）のいう「フレーム」を援用し構成された概念であり、「大学授業におけるさまざまな出来事とその出来事への主観的関与とを支配し組織化する、個人ないし集団の保持する枠組み」を意味する。大学授業への関与者（教授者、受講生たち、参観者たち、研究者たち）はすべて、それぞれの大学授業フレームに拠って、そのつどの授業場面を主観的に構成する。本研究では、大学授業フレーム概念によって具体的な授業場面での教員と学生、教員同士、学生同士の相互行為のありようが分析され、さらに相互行為経験によるフレームの形成や成長が「フレームの応答的変容」という生起を中心にして検討されている。フレームの変容に関連しては、ゴフマンも「転調」（keying）や「装い」（fabrication）などについて論及しているが、論者は、相互行為におけるフレーム変容に焦点づけて、あえてこの「応答的変容」という概念を構成したのである。

近年の我が国では、高等教育システムの大きな変動に直面して、大学の教育についても一定の社会的関心が向けられてきている。しかしこの社会的関心に応答すべき大学教育の実践的研究、とりわけ大学授業研究は、まだほんの端緒にすぎないばかりである。しかもいまだ数少ない実践的大学教育研究の大半は、一般化のきわめて難しい主観的な事例報告であるか、さもなければあまりにも外在的で評論家的な一般論であるかの、いずれかである場合が多い。これに対して、本研究では、考察の素材の多くが、論者自身の実際の教育実践に求められている。このようにアクションリサーチの性格をつよくもつ本研究は、まさにこれまでの大学教育研究の欠如、すなわち内在的実践研究の欠如を埋めるものであると評価することができる。

本研究の基本的タームは、「大学授業における相互行為」、「大学授業フレーム」、「大学授業フレームの応答的変容」の3

つである。互いに密接に関連するこの3つのタームは、授業関与者たちそれぞれが構成する文脈に着目する質的实践研究を可能にする概念装置である。フレームによる状況構成、複数の状況構成がせめぎ合う相互行為局面、せめぎ合いによるフレームの再構成。この3者の緊密な相関への着目こそが、ダイナミックな授業研究を可能にしているのである。

ところで、「フレーム」概念を用いる議論は、ともすれば、できあがったフレームの主観的偏向などについて外在的に論ずるような理論展開にとどまりがちである。しかし本研究での「フレーム」は、大学授業における相互行為の分析に用いられる。そしてそれによって、相互行為における「応答的変容」といった局面を含めて、フレームのダイナミックな生成そのものが、議論されることになる。そればかりではない。「応答的変容」という見方によって、フレームを論ずる文脈は、たんなる相互行為論のそれから相互形成論のそれへと移動することにもなる。かくして、大学授業研究を教授・学習論、FD論へと接合する可能性も開けてくる。まとめていえば、本研究は、フレーム論を介することによって、大学授業論を、ダイナミックな相互形成論としての教授学習論、FD論へと展開する道筋を、開いているのである。

今一度繰り返すなら、本研究の主要な部分は、論者自身の大学教育実践を対象とする論者自身の体系的研究である。このようなアクションリサーチとして展開された本研究は、在来の理論の多くがそうであるように教育の改革や実践に対して外から啓蒙機能を果たそうとするのではなく、他の実践者たちと内的に連携する道筋を開くものでもある。この意味で本研究は、教育の改革と結合すべき理論のありようを、典型的な仕方では示しているといえよう。アクションリサーチの徹底的な遂行は、理論家としての訓練を十分にはつむことのできない初等教育や中等教育の実践者たちに対しては、当然ながら、あまりつよく望むことはできない。その意味で、大学教育の研究者が自らのポジションを十二分に活かした本研究は、相対的に不利な条件にある他の学校種における同種の研究や実践に対して、1つのモデルとなることもできるすぐれた理論的試みであるともいえる。

もっとも、すでに「論文内容の要旨」で記したように、本研究では、ただたんにアクションリサーチばかりではなく、第Ⅱ章や第Ⅳ章などを中心に、若干の量的研究もまた展開されている。適用するに相応しい方法論は、なにも一つに限られるわけではなく、そのつどの状況の差異に応じてさまざまでありうる。いささか折衷的ではあるとはいえ、方法論のこのように柔軟な使い分けもまた、本研究の特徴の一つである。本研究では使い分けはかなりうまくなされているが、今後は、質的研究法と量的研究法の適切な組み合わせ方について、十分に自覚的に追求する必要はあろう。このような自覚的研究がなされるなら、その仕事は、教育の実践的研究にしばしばみられる方法論上の抗争を宥めるために、重要な貢献を果たすことになるはずである。

このほかにも、本研究について、いくつかの課題を指摘することができる。

まず第1に、「大学授業フレーム」という中心概念について。この概念を使用することの研究上の有効性、この概念の大雑把な全体的構造的把握などは、本研究においてすでに十分に示されている。しかし、この特異な概念と関連諸概念との相互関連を示すマッピングは、まだ十分明晰に提示されているとはいえない。ゴフマンのフレーム概念そのものについても、ただちにその応用に向かう前に、その理論の可能性が十分に汲み尽くされるべきである。たとえば、フレームの変容と関連してゴフマンの言及する「転調」や「装い」には、教育の実践的研究に対してかなり大きな応用可能性が残されているものと考えられるのである。

さらに第2に、理論化の水準の相互行為レベルへの限定について。たとえば、論者の言う「ストレス」は、場合によっては、より大きな社会的文脈に規定された「コンフリクト」として把握すべきである。本研究は、総じて教育実践の日常的相互行為レベルに焦点づけられているが、これを、より広汎な社会・文化レベルを見据えた視角から見直す必要もあるだろう。

ただし、これらの今後の課題についての指摘は、本研究の欠陥を示すものではない。これらは、きわめて重要でありかつ個性的でもある問題設定のもと、行き届いた目配りをもって疎漏なく遂行された本研究に、事後的にみいだされる将来的課題であるにすぎないのである。したがって、これらの課題の指摘は、本研究の博士学位論文としての価値をいささかも減ずるものではない。

よって、本論文は、博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成17年2月9日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。